

笑い声が響く♪中小っ子

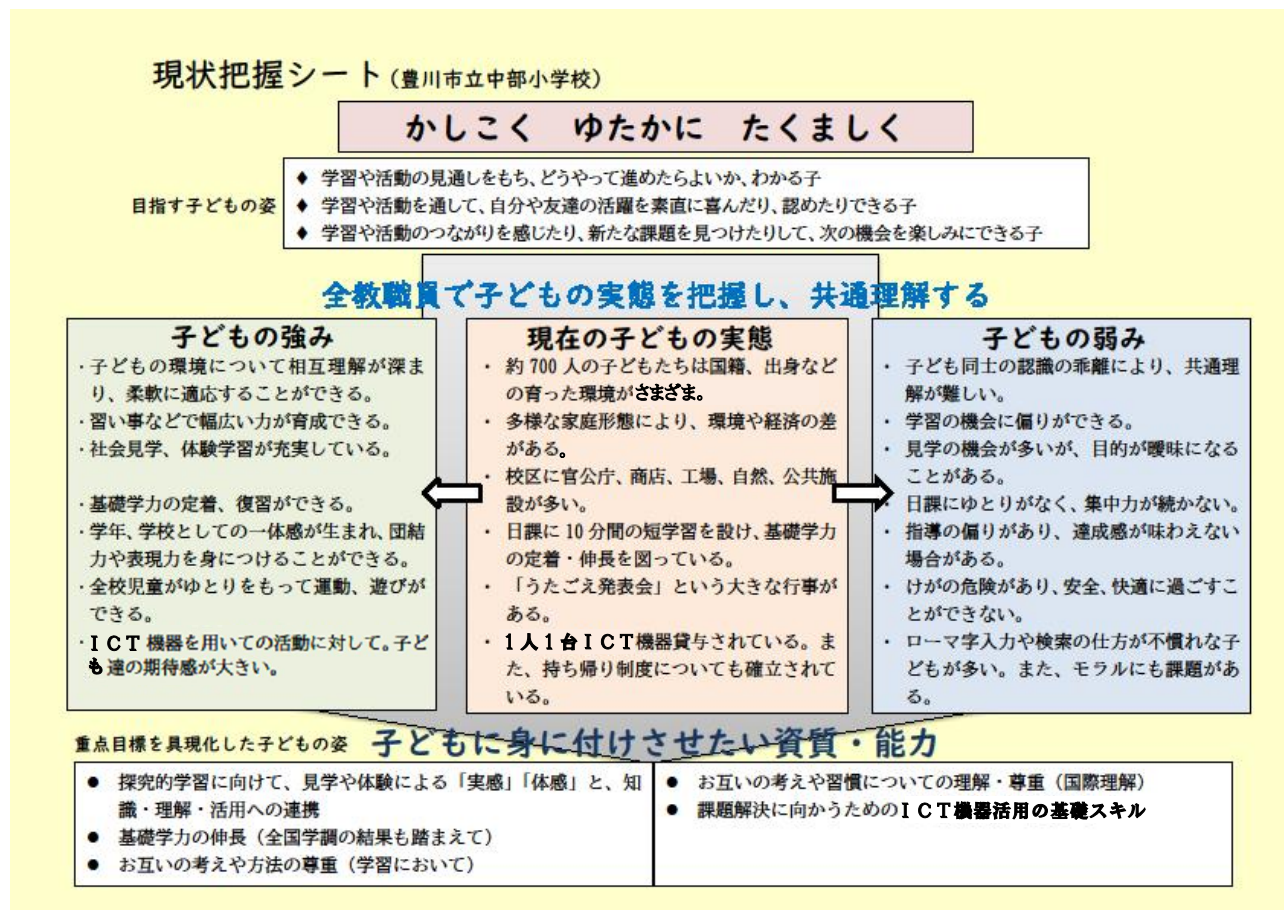
～ 学びの笑顔につなげる工夫 ～

豊川市立中部小学校

1 はじめに

本校は県東部、豊川市の中心部である諏訪町に位置している。地理的な条件だけでなく、市役所、警察署、消防署といった行政や防災を担う施設や、商業施設、住宅地、鉄道や幹線道路にも隣接した、市民生活においても中心にある学校と言える。そのような立地において児童は、学校目標である、「かしこく、ゆたかに、たくましく」あろうと日々過ごしている。本研究を推進していく中で、今一度、本校の児童の現状を把握しようとアンケートを実施し、SWOT分析を試みた。それにより、この地域に在住し、本校に在学していることの強みを発見することができた。一つ目に、校内においては児童数が多いことや、外国籍の児童が在籍していることで豊かな関わりができたこと、校外においては行き交う人々との交流や多種に及ぶ商業、工業施設が近隣にあることで多様な価値観を得られたりする傾向にあった。二つ目は、習い事やスポーツクラブ施設が比較的多く存在し、また距離が近いために通いやすく、学校外での幅広い活動を行うことができていること。三つ目は、児童は「うたごえ発表会」をはじめとして、他者から見られ、認められる機会をたびたび得ることで、自己肯定感がやや高い傾向にあった（資料1）。

【資料1 SWOT分析による本校の現状把握シート】



これまで本校では、学習の効果・成果を上げる手だてとして、学校や学年、学級といった環境基盤を整えることに力を入れてきた。友達との関係を良好にし、「居心地がよくなれば学習にも安心して意欲的に取り組めるだろう」との仮説の下に目指す子どもの姿を想像し、それを支える活動に力を入れてきた。一例として、本校の伝統でもある「うたごえ」行事がある。初夏にはペア学年でお互いの声を聞き合い感想を伝え合う「うたごえ集会」を行っており、その経験と自信を基に、秋には大きなホールで全校児童や保護者に向けて披露する「うたごえ発表会」を開催している。その他にも「伝える」「つながる」喜びを味わえる活動を機会を捉えて行ってきた(資料2)。学習においても、友達と考え方や思いがつながる喜びや、解けた、できた、分かった喜びを「笑顔」と称し、それを実現しようと、授業案の中には指導の手だてや教材・教具の工夫である『笑顔+ONE(プラスワン)』を記述し、実践を重ねてきた。

【資料2 目指す子どものすがたと、それを支える活動】

目指す子どものすがた

- ◆ 学習や活動の見通しをもち、どうやって進めたらよいか、わかる子
- ◆ 学習や活動を通して、自分や友達の活躍を素直に喜んだり、認めたりできる子
- ◆ 学習や活動のつながりを感じたり、新たな課題を見つけたりして、次の機会を楽しみにできる子



支える活動

【伝統のうたごえ】

- うたごえ集会(校内での感想交流)や、うたごえ発表会(大きな会場での公開)

【認め合い、安心する活動】

- スマイルポイント、スマイルカード、あいさつ運動、新入児ウェルカムカード、児童の声を反映する掲示板、放送の工夫など

本研究のテーマである「自ら学ぶ力の育成に関する研究」を受け、本校が進めてきた「学ぶ喜びの笑顔」が自ら学ぶ意欲につながり、それが本校の目指す力になるという考えと合致することが分かった。そこで、より本校の児童の力を高められるという思いから、両者の利点を融合できるように取り組み始めた。

2 実践

(1) 研究の概要

本校が考える笑顔とは単純に表情のみを指すものではなく、授業の中で見られる期待感や喜びを意味し、3分類して考えてきた(次ページ資料3)。A分類の笑顔は「わくわく楽しみな笑顔」で、学習への期待感が高まる場面である。ここでは単元や教材との出会いの場面を想定し、より魅力的な出合わせ方を工夫しようと努めている。同様にB分類は「友達とつながりを感じた笑顔」で、学習中盤における作業や協働、意見・考えの共有の場面であり、C分類は「次へのやる気に満ちた笑顔」で、学習終盤の振り返り、そして次時の予告の場面としている。これらをAARサイクルに沿わせることで、私たちの授業づくりに取り入れている。

【資料3 笑顔の3分類とAARサイクルの関係】

A分類の笑顔	B分類の笑顔	C分類の笑顔
A 【Anticipation】に対応	A 【Action】に対応	R 【Reflection】に対応
わくわく楽しみな笑顔	友達とつながりを感じた笑顔	次へのやる気に満ちた笑顔
やってみいたいという期待感	仲間と学ぶ楽しさ 思いを伝えられた充実感 新たな考えに触れたおどろき	内容を理解した充実感 次時への希望を抱く楽しさ
子ども達の笑顔のために、私達が行う「笑顔+ONE」		
見通しがもてる計画やめあての設定と提示、授業導入の工夫を行うこと	解決に向かおうとする意欲に応えるために、支援や手だての工夫を行うこと	学習を振り返り、失敗や成功の要因を探らせ、次の学習や活動への意欲をつなげること

(2) 令和6年度の実践内容から

ア A：わくわく楽しみな笑顔について

① 特別支援学級道徳科での場面

特別支援学級における実践では、道徳科「あしたはえんそく」（だれとでもなかよくB〔親切・思いやり〕）が行われた。遠足のバス席をめぐって、自分勝手な言い分を通そうとする「うさぎさん」に、誰もが気持ちよく参加するためにはどうしたらよいかを考える題材である。教師は児童の特性を考慮し、児童の目線の高さで説明する。そして教材を読み聞かせるだけでなく、ペーパサートなどの具体物を用いて授業を行い、更に向きを変えると動物たちの表情が変わって感情の動きが捉えられるよう、いずれも視覚的な効果をねらった工夫がなされていた。



ペーパサートを用いた学習

② 第6学年社会科での場面

国の政治のしくみと選挙の単元から、「他人事じゃない、私たちができること」と題した、選挙の投票率を取り上げた授業を行った。令和4年度の参議院選挙の投票率、「52%」の提示を皮切りに、次から次へと数字を列挙していき、それらが何を意味するのか推測することから進んだ。児童は、数字とグラフが組み合わされて、その事実が判明するたびに授業に引き込まれていった。そして、投票率が低いのは自分たちの世代の損になるだけではなく、国全体に関わる大きな問題だといった衝撃的な事実、それはどうしてなのか、これからどうしたらよいかを解明しようと、わくわくしている様子だった。



52%の提示から始まる

イ B：友達とつながりを感じた笑顔

① 特別支援学級道徳科での場面

登場人物の気持ちを考える場面では、「うさぎさん」に拒否された隣席の動物たちの気持ちについて「表情カード」を用いた。それが児童の言いたいことを整理する助けになり、聞く児童もカードと話者とを関連付けて耳を傾けた。また、当事者や相手の立場に擬似的に立ち、より深く自分の感情の動きを捉えさせようとロールプレイをした。演技とはいえ、クラスメイトに「あなたの隣はいや！」と言われて悲しい気持ちになり、教材の中の登場人物に自分の感情を投影することができていた。



ロールプレイの場面

② 第6学年社会科での場面

授業の中盤では、世代ごとの行政サービスの差、とりわけ給付金の施行や廃止について、データやパンフレットの資料を基にペアやグループで何度も話し合い、その理由を考えた。学習の途中では意見交流アプリを用いて仲間の考えを知り、共有することで同様な意見に勇気付けられたり、異なる意見から視野を広げたりすることができていた。「政治に関心が高いのは年齢の高い人。だからお年寄りに向けたサービスが多い」と高齢者サービスの充実からその要因を探り当てようとして、「給食が無料だよ」「赤ちゃんや幼い子をもつ人へのサービスもたくさんあるよ」と子育て世代への無償化や給付金の充実度を発見したりと、自分の気付きや考えを他者と意見交流することで自信を得ることができた。そして「選挙で投票してもらうためには、その世代をねらったサービスをするのが効果的だろう」と学習の中心である課題の解決に近づけていった。

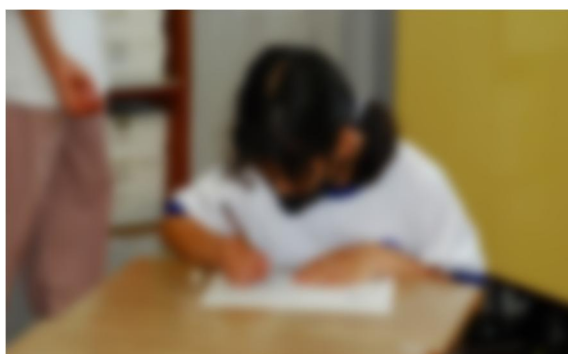


ペアでトーク

ウ C：次へのやる気に満ちた笑顔

① 特別支援学級道徳科での場面

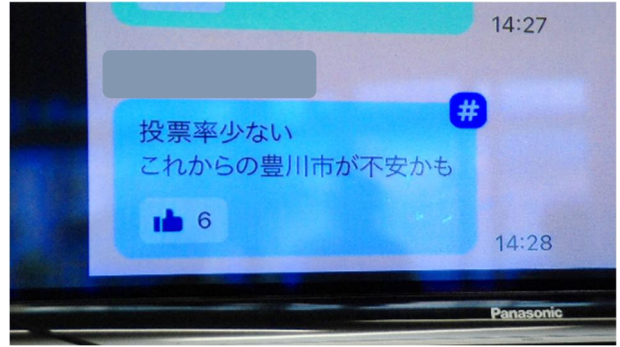
授業の最後には、学習の振り返りとして「うさぎさん」に手紙を書いた。登場人物に投影してきた気持ちを、自分の立場に置き換えて考える大切な場面である。手紙を読み上げる場面では、手紙に記述した「なかよく」や「やさしく」といった言葉を抽出し、それらをホワイトボードに掲示して読み上げていく中で、児童も学習に取り組めた満足感と穏やかな気持ちに包まれていた。またある児童は言葉に出すことはなかったが、その明るい表情や弾むような体の動きからは、次の道徳の学習への期待感が表れていた。



うさぎさんに手紙を書く

② 第6学年社会科での場面

終盤では、投票率の重要性を理解し始めた児童に教師は、次時の授業で用いる市長選挙の投票率である「29%」を示した。学級委員を決めるのにクラスの3分の2の児童は関心がなかったという例えに驚き、児童は「投票率が低すぎる、私たちの市はどうなっちゃうのだろう」などと、タブレット端末を通して書き込みを始めた。授業終了後にも「やばいかもかもしれない」「家の人に聞いてみたい」と、アフタートークがあふれ、児童からは本時の満足感とともに、次時への期待が感じられた。



意見共有アプリへの書き込み

エ 令和6年度の総括

その他の実践においても、デジタル機器と楽器を用いた第1学年の音楽科の学習や、知識構成型ジグソー法を用いて思考の共有を図った第6学年の算数科など、さまざまな「笑顔+ONE」が考案された。令和6年度の研究の振り返りでは、課題として以下の三つが挙げられた。一つ目は、児童の何をもって笑顔が見られたとするかである。先に表情のみを指すのではないと述べたが、有効な検証方法を確立しないまま進めてきた。児童の活動の様子や発言の内容、ノートや振り返りの資料等を収集して検討するとともに、総合教育センターから提示された「段階図」の活用を視野に入れて考案していく必要性を感じた。二つ目は、分類された「笑顔」が全ての教科に通用するものかどうかである。今後、各自の授業研究や市教委訪問事業での教科指導員の助言を基に検討し、試行していくことを確認した。三つ目は、本実践では授業の導入、展開、終末に一つずつ「笑顔+ONE」を設定した。授業づくりとしては理想的であるが、すべての要素を1時間の中に入れ込むことは、授業の進度や場面によって、特に道徳科や継続活動の多い生活科、総合的な学習の時間などにおいては困難なのではないかとの声もあり、検討材料になった。また、授業づくりにおける担任の負担も考慮に入れなければならなかった。「笑顔+ONE」は、日々の授業において目標を意識し設定していくものである。手だてありきでの授業づくりは本末転倒であることから、いつ、どこに、何を設定していくかの焦点化を図り、今後の実践に向けて教職員全員で共通理解を図っていくことになった。

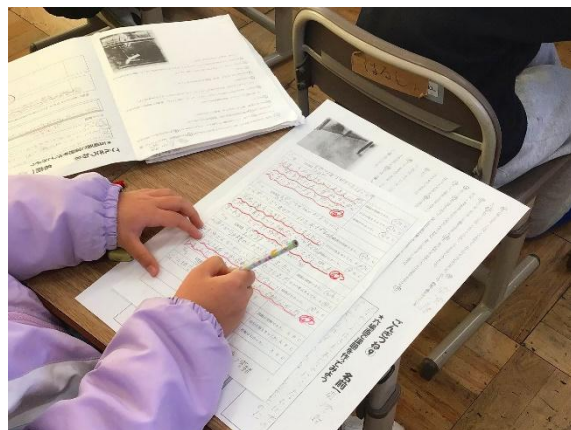
(3) 令和7年度の実践から

次第にAARサイクルのうち、振り返りの「R」から次時の「A」につなげることを重視するようになってきた。全ての教科や単元に当てはまるわけではないが、授業の連続性を意識すればそれは必然である。振り返る手法については、総合教育センターから提唱された「学びの段階図」を参考にし、児童が自らの学びの位置を学習の課程で把握できるようなものを考案した(資料4)。まず手始めに、二つの学年で試用してみた。第6学年の算数科ではウェブフォームを用いたアンケート方式を使用し、得られた得点を集計したり、振り

【資料4 本校版 学びの段階図】

種類	3	2	1
◎A	今日の学習は「やってみた」「できそう」と思う。自分で式や考え方を書けそう。	今日の学習は「わからない」「難しそう」と思う。友達に教えてもらってから自分で書きたいと思う。	今日の学習は「おもしろくない」と感じた。自分にはできないと思う。
◎B	自分の式や考えを書き、友達に説明したり、教えてもらって、すすんで学習しました。	友達に教えてもらったら、式や考えを書いて、少しずつできるようになりました。	友達の見聞聞いても式や考えを書くことができず、うまくいきませんでした。
◎C	今日の学習がわかり、「もっとできるよになりたい」「次の学習もがんばりたい」と思いました。	友達に教えてもらって今日の学習がわかり、「できるよになった」「次は自分できるかな」と思いました。	今日の学習が難しく、「わからない」「わかんない」と思いました。

究したい課題を単元初期に出して、それについて順次解決していくといった形ではなく、毎時、授業開始とともに児童が課題を出し合い、幾つかの候補から選択していくといったスタイルだった。児童はマイ教科書とともに振り返りを蓄積したポートフォリオを併用し、課題作成から解決に向けての仲間との協働、発表へと活発に学習を行った。課題作成の方法には前述したのも本時での方法も利点はそれぞれにある。私たちの研究で重要なのは連続性を意識した授業づくりを行い、そして活動時間と「これならできそうだ」という児童の気持ちを担保していくということである。



第4学年国語科 マイ教科書

その他にも、活動途中での再集合や意識の集中が困難な低・中学年の体育では大型テレビを活用し、視覚情報を多用した丁寧な活動説明で学習の見通しをもった。また、さまざまな教科で、学習の区切りに段階図を利用した「学びの位置確認」を試みた。児童は自己評価とともに考え方の共有を行い、教師はつまづきのある児童への支援のきっかけを把握することにも役立った。そして更なる「笑顔の手だて」を考えるヒントを得て連続性を意識した学習活動を行い、いきいきと学ぶ児童の姿が見られた。



いきいきと学ぶ児童の姿

イ 笑顔+ONEの定義の変更 ～修正授業案として再生～

研究が進むに従い「笑顔+ONE」が曖昧になってきた。元来は笑顔につなげる手だての、押しの手という考え方だったが、「どうしても複数の手だてが必要」「他の手だてと『笑顔+ONE』との区別がつけにくい」との声も教職員間で聞こえ始めた。そこで、「笑顔+ONE」の再定義を試みるこ

とにした。これまでは、日々の授業で講じる「笑顔を表出するための手だて」をそう呼んでいたが、来年度からはこれを「笑顔の手だて」と改称し、オンリーワンの手だてでなければならないという誤解を解くことにした。さらに、児童の学びの位置や方向に柔軟に対応する次時の「変更案・修正案」を「笑顔+ONE」と改名し、明確に区別できるように提案していく予定である（資料7）。

【資料7 笑顔+ONEの再定義】

従来のものは「笑顔の手だて」と改称（予定）		
児童が見通しをもてる計画やめあての設定、授業導入の工夫を行うこと	児童が解決に向かおうとする意欲に応えるために、支援や手だての工夫を行うこと	児童が学習を振り返り、失敗や成功の要因を探り、次の学習や活動への意欲を継続できるようにすること



これからの「笑顔+ONE」は・・・
児童の学びの位置や方向に柔軟に対応する次時の変更案・修正案（予定）

資料8は、3年生体育科「走り高跳び」を実施した際の「新・笑顔+ONE（仮称）」である。開始時にはカラーマークが右上のゾーン「やる事がすぐにわかった、楽しみで自信がある」や、左上のゾーン「何をやるのかなんとなくわかった、むずかしそう、少しだけ心配」に集まった。実際に、遊び心をくすぐるジャンプトレーニング「リンリン☆ジャンプ」や、カラフルなマットやゴムバーが設置されたピットを目にし、大型テレビを用いた授業のオリエンテーションによって、多くの児童が新しく取り組む種目に対して前向きな意識をもっていったことが分かった。ところが、授業終了時には下部の「うまくできなかった、楽しくなかった、次の授業が心配」といったゾーンにカラーマークを動かした児童が4人いた。この児童のコメントを読むと、「踏み切る足がどちらか分からなかった」「ゴムが高くて少しこわかった」など、技能面の悩みや高さに対する不安感があることが分かった。早速次時には、振り上げ足を強く意識させることで、自然に利き足で踏み切れるような、思考の転換を促す動きづくりを取り入れた。また、バーの高さを更に低くしたピットを設定したり、増やしたりして児童に安心感を与え、

「次に進もう」「もっと学びたい」といった気持ちを喚起、持続する「笑顔の手だて」を打つことができた。本資料は、普段は週案等にメモしていくものを、あえて公開授業用に「見える化」したものである。現在は一部の担任でプロトタイプを作っている段階であるが、今後スタイルや運用方法を確立して進めていこうと考えている。

【資料8 新・笑顔+ONE】

第3学年2組体育科授業案（前時から本時への「笑顔+ONE」）

令和7年9月10日 授業者 安田

前時の児童の表情（授業はじめとおわり）

手だてに関わる児童の活動の様子やコメント

- ピットでの走り高跳び体験において、バーの高さに不安を抱いている様子の児童がいた。
 - ○○さんは踏み切り足が逆になってしまう。運動に自信を持っているので、落胆も大きかった様
 - 振り上げ足を「キック」と表現した児童。動きの意識として次時に広めてみたい。
- 手だての工夫
- リンリンジャンプの際は、踏み切り足を意識するポーズを知らせる。
 - 経験量を増やすために、ピットを1ピットから4ピットに増やす。バーの高さの不安を緩和す
 - り、開始の高さも4つ設定し、練習しやすいピットを選択できるようにする。
 - グラスバーについては、授業の終盤に体験させるように変更する。

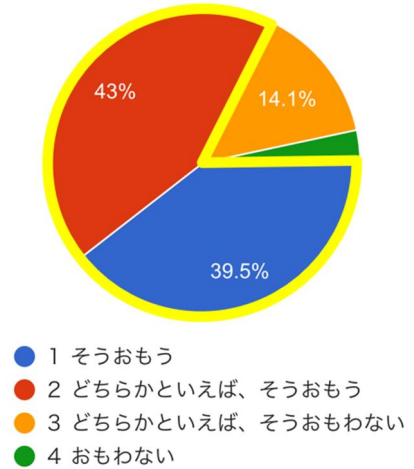
3 実践の成果と課題

これまで私たちが直面してきた課題は、段階図をいかに活用していくか、実践している手法が各教科に応用できるものなのかといった方法論的なものに加え、私達が提唱している「笑顔」とは何か、何をもち「学びの笑顔」が発現したと言えるのか、といった抽象を具体に変えていくものであった。後者に関してはまだ検討が必要なものの、児童の様子を観察したり、アンケートの回答を分析したりする中でも、数値上では幾つかの項目で「笑顔」が見られた。アンケートによる意識調査の主なものでは、「授業で夢中になって取り組むことがある」では83%の児童がポジティブな意識をもっている（資料9）。さらに「いろいろな授業でこれから何をやるのか分かっている」では81%、「授業以外（行事や活動）で夢中になることがある」では、実に92%と、学習をはじめとした学校活動において「笑顔」で取り組んでいる様子がうかがえた。一方でまだ「笑顔」が見られない点がある。例えば、「授業で不思議に思ったり、もっと詳しく知りたいと思ったりすることがある」「難しいことでも失敗を恐れないで何でも挑戦している」の回答では、25%の児童が深みへ歩み寄ろうとする姿勢や挑戦する意欲に関して躊躇している様子がうかがえる。また、「振り返りを行うと次の授業で何をするのか分かる」では、37%の児童が「そう思えない」と回答している（資料10）。先の調査結果と矛盾するようだが、児童は学習の見通しができていないにも関わらず、それが何によるものなのか自覚し得ず、結果として手だてが児童の期待に十分応えられていないという実態が浮き彫りになっている。私たちが今年度から力を入れて取り組んできた、振り返りから次時の授業への接続については、授業がうまくいったり、また児童の学習の成果が上がったりといった教師から見た効果は一定程度あると考える。しかし、児童自身はそれを体感できていない様子である。今年度後半から始めた新たな考え方の「笑顔+ONE」について、その運用の仕方や使用する媒体、実施のタイミングなどさらに検討を重ね、今後の手だてとして有効であるかを検証していかねばならない。

4 おわりに

本校の「笑顔」をテーマにした行事や学習における取組は10年にも及ぶ。その間にも「笑顔」に関しての検討・解釈を重ねて現在に至っている。それぞれの年度における解釈はさまざまだったが、どれも不正解はなく、時を経て色褪せてしまったわけでもない。その全ての積み重ねで現在に至っている。令和8年度には、豊川市の委嘱を受けた研究発表会が控えている。これにおいても本校の「笑顔」のコンセプトを大切にしながら、本研究の流れをくんだ実践を継続し、児童の「もっとやりたい」「今度はこんな方法を試してみたい」といった気持ちが更に膨らむように、「笑顔」をテーマとしたさまざまな学校活動を充実させるように取り組んでいくつもりである。

【資料9 調査：授業で夢中になって取り組むことがある】



【資料10 調査：振り返りを行うと次の授業で何をするのか分かる】

